31. 受け容れること Acceptance

生をあるがままに受け容れることです。どんな理由ももたずに、楽しみなさい。

偉大な禅のマスター、白隠が住んでいた村で、ある娘が妊娠した。彼女の父親は、彼女をおどしつけて、恋人の名前を知ろうとした。そしてついに、彼女は罰を逃れようとして、それは白隠だと告げた。

父親はそれ以上なにも言わなかった。だが時が満ちて、子どもが生まれると、彼はすぐに白隠のところに連れて行って、子どもを放り出した。「これはお前の子どものようだが」と彼は言い、ことの不名誉に対してあらゆる

禅マスターは、ただひとこと、「おお、そうなのか？」とだけ行って、その子を腕に抱いた。それからというもの、彼は、その子どもを、ぼろぼろになった長衣(じょうえ)のたもとにくるんで、どこへでも連れて行った。

一方、母親は、自分の子どもから離れている苦しみに耐えられなくなっていた。彼女はほんとうの父親の名前を明かした。
彼女の父親は白隠のもとに駆けつけて、ひれ伏し、何度も何度も許しを乞うた。
白隠は、「おお、そうなのか？」とだけ言って、彼に子どもを返した。

これが受け容れることだ。これが " タータ " だ。生がもたらすものはなんでもオーケーだ。完全にオーケーだ。これが鏡のような質だ――なにも良くはなく、なにも悪くはない。すべてが神性だ。生をあるがまま

喜びに理由があると、それは長くはつづがない。喜びになんの理由もなければ、それは永遠にそこにある。
ZEN：THE PATH OF PARADOX, Vol.3, pp.175-176

Revision #4
Created 5 October 2024 07:54:58 by ゆう
Updated 24 October 2024 07:27:59 by ゆう